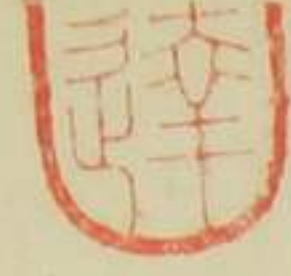


414  
A4041

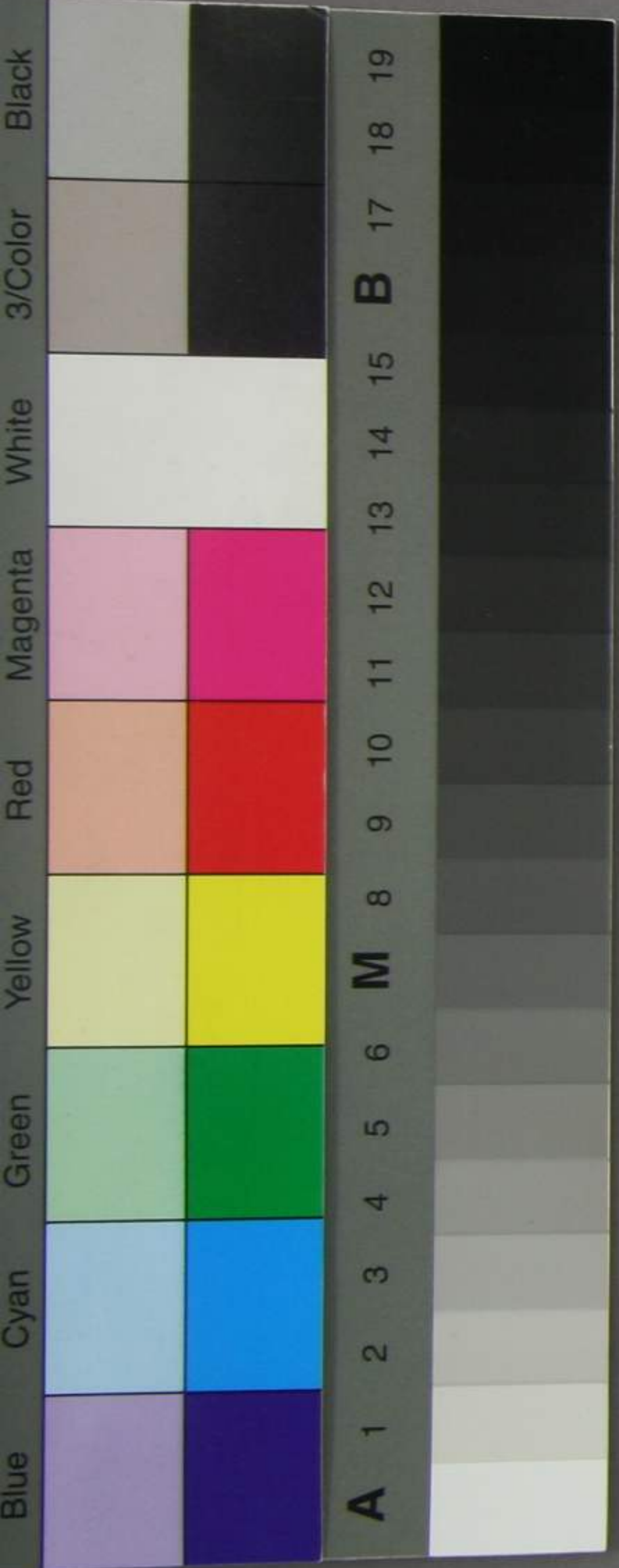


長崎高島岩坑儀、付英國公使方  
申出次第上申

長崎縣下高島岩坑事業永續方、付我政  
府、於テ保護相成、及分撥院在留英國高  
人、ジャル子ニ、マテソシ會社、同國公使、差出  
各書、面々款、未考、其係、同國公使、別紙、通  
申、出、多、受、者、如、何、回、答、及、ヒ、可、然、或、速、  
何、分、ハ、裁、下、有、シ、至、右、本、答、者、按、テ、通  
亦、係、以、候、及、上、申、テ、也  
十一年十月十四日  
加務ノ高島宗則

太政大臣三條實美殿

大正  
十一年  
四月  
贈



揮啓陳ハ高島炭坑之事并元老院前副議長後藤  
象二郎氏英商ジャルヂーン、マテソン會社ニ巨  
額ナル負債ノ事ニ関シ目今差起リ居キ重事件  
ニ儀ニ付同會社ヨリ本月廿七日附ヲ以テ拙者  
宛ニテ別紙ニ通陳述書呈出キ付別右寫及進  
達至且又同會社ヨリ拙者ヲ經由テ貴政府ニ呈  
セシカ為メニ認メタル其訴件ノ顛末書ヲモ相  
添差越キ同會社ニ於テハ其顛末貴政府ニテ法  
熟考相成キハ、以理相分リ且貴政府ニ干渉  
ニ非サレハ目下ニ危急ヲ援セ内外關係人ニ利

益ヲ保護シ其自己ノ過失ニ非スレテ大損失ヲ  
受ルノ難儀ヲ免レシメ難キノ次第函ヲ解可相  
成儀ト信用露在キ固ヨリ衆關係人ニ条理ヲ得  
セシメ貴重ナル財産ヲ毀害セシムルノ事ニ様  
必用ニ扶助相成キハ貴政府ノ權力ニ可有之事  
ニ付回會社ニテハ本所ヲ閣下ニ申出キニ別紙  
陳述書ニモ有之通り今般所扶助ヲ相成キ難儀  
ニ於テハ本ト日本ノ高位ニ在ル人々ノ誠實ニ  
大ニ信憑ヲ置キ其意ヨリ生シタル儀ニ付日本  
政府ニテハ速ニ本所ノ案理所認メ可相成ト確  
信致シ其儀ニ有之者就テハ別紙ヲ添ニ記載キ  
詳細ノ事實閣下ニ於テ所熟考相成キ迄ハ暫ク  
本件ニ付拙意何事モ不申上何レ以却テ有第ニ

後協議ニ及ヒ其上ニテ關係諸人ノ公平ヲ得セ  
シメ且英國ノ名譽ヲ害セサル様ノ變分方モ決  
判相整可申ト存キ在保島炭坑不而締メ義士  
過以ノ騷動ニテ済以セラレテ通ニテ現今ノ受  
理具宜ヲ得サルニ由リ炭坑ノ産出致滅却キ義  
ニ付一日モ早ク改革ノ變置必用ノ事ニ有之者  
此取將考意成ル所致白

一千八百七十八年九月廿日

在東京英國公使館

英國特命全權公使ハリス、エス、パリス

外務卿寺島宗則

閣下

卜 務 省

弊社ノ利害得失ニ大關係ノ一事件ニ就キ尊威  
ヲ冒シ今其事ノ顛末書リ以テ閣下ニ呈ス伏願  
クハ閣下宜シク日本政府ニ進達アラシムテ後  
顛末書ニ於テハ前後事ノ顛末ヲ完全ナラシメ  
ント欲シ文ノ頗ル冗長ニ涉ルヲ願ハス我等信  
認シテ明瞭ナリトスル所ノ事實ヲ筆テ悉ク詳  
細ニ記載シタリ而シテ其事實ニ至テハ命アルノ  
時ニ際シ路ニ之ヲ証明セシトス  
我等日本政府ノ干渉ヲ乞ヒ其扶助ヲ求ル所以  
ノ事情概要左ノ如シ

第一 千八百七十四年中我等平生ニ其位置ノ

卜務

夕務

高島に於て一國に感望アルノ人ト認知シ居タ  
ル日本ノ紳士後援者象次市氏ヨリ依頼ヲ受ケ同  
氏カ日本政府ヨリ依頼ヲレタル高島炭坑ヲ担当  
トシ弊社ニテ出金ヲナシタリ

第二 其前六ヶ年間に外國人特ニ英國人ナル  
ゴロウル高社ニ於テ炭炭坑ヲ切タルニ其後同  
高社破産セシヲ以テ千八百七十四年ニ至リ日  
本政府、テ同高社財産引受人ト談判ヲ遂ケ之  
ヲ政府ニ引渡シタリ

第三 弊社ハゴロウル高社ノ債主トシテ高島  
炭坑ノ為メ同高社ニ貸金ヲナシタルトモ之レ  
アリ由テ炭坑事業ノ實際ハ特別ニ之ヲ詳知シ  
後援者象次市氏ヨリ依頼ノ時ニ當リ炭坑事業ニ外

國人ノ資本ナリ入ル、ノ差支十キハ従前ト同地  
ナルヘキヲ確信シ且炭坑ノ産出ニ於テハ叙カ  
出金償却ノ担当トナスニ至ルヘキヲ確信シタ  
リ

第四 後援者象次市氏炭坑依頼ノ約定言ハ六十  
三万三千八百五十五円二十セントニテ高島二十  
五万五千円細メ残餘ハ金額多寡ニ至ル迄年々六万  
五千円ナリ細メヘキノ取極メナリ

第五 千八百七十六年前ヨリ同年十二月迄ノ  
右年賦上納ハ悉ク弊社ヨリ即チ弊社ノ出金ヲ  
以テ日本政府へ上納シ其外別紙額未定ニ詳記  
スル如ノ事情ヲ以テ弊社ヨリ後援者象次市氏へ  
相渡シタル金額ハ三十四万四千八百六十

セントトニ及フ是系皆同氏ガ日存政府一別口ノ  
負債償却ニ充シモノナリ是等出金ヲ致スノ際  
ニ於テハ後藤氏外ニ負債弁解ノ資力ナク言島  
炭坑ヲ以テ弊社ト云レバ成スニ非カリセハ政  
府一對シ其負債ノ救済ヲ盡スノ手限無リシト  
ト後ニ察セラルナリ

第六 日知政府ニ於テハ別紙類未考ニ詳記ス  
ル通ノ事情ニ由テ此等借金ノ事并ニ其金ノ何  
等ヨリ出シカハ充分ニ通知セラル、所ニシテ  
又其外炭坑代理人トシテ弊社ヨリ金負テ政府  
へ上納セシテ救回アリ而メ之ヲ上納スルニハ  
其金ノ炭坑ノ為メ以テ代理人タルノ屬ヲ以テ  
後藤氏一取換ヘシモノナルトテ明ナラシムル

ノ手續ヲ以テレタリ

第七 炭坑譲請約定ノ日ヨリ千八百七十八年  
二月ニ至ル迄上納金又ハ炭坑作業費トモ後藤  
象次郎氏ヨリ曾テ出金セラレシモノナク皆是  
レ弊社ノ引受ケ辨シタル所ニシテ大ニ其事業  
ヲ擴張シ前ニハ一日ニ三百乃至三百五十噸内  
外ノ出産額ナリシヲ六百乃至八百噸ノ多額ニ  
至ラシメ又坑内火災ヲ發セシ時之ヲ消滅セシ為  
メ海水ヲ侵入セシ後ニ於テハマタ其水ヲ汲揚  
ケ旧ニ復スル迄ニ巨大ノ金額ヲ費シ且弊社ニ  
テ炭坑支配中ハ後藤象次郎氏ヲ維持シテ始終  
出金ヲナシ其急ニ迫リ來ル債上ノ督責ヲ免レ  
シメタリ

第八 後藤象次郎氏ヨリハ弊社出金ノ抵當ト  
シテ炭坑ノ機械及其出産ノ石炭取押ノ權ヲ弊  
社一与ハ或ハ与フヘシト云フ數通ノ證書ヲ差  
入レ又書面ヲ以テ弊社ノミヲ炭坑ノ支配人及  
其代理人タルヘシト命シ其約定證書并代理人  
ヲ命スルノ證書ニ於テハ日本官位アル紳士ノ  
承認保換セララル所ノモノタリ  
是ニ依テ千八百七十四年十二月ヨリ千八百七  
十八年二月ニ至ル迄ノ間ハ政府又ハ何人ヨリ  
ノ異議故障モナク只弊社ノミナル炭坑ノ代理  
人及其支配人トシテ公辦事務ヲ取扱ヒ前文變  
災ノ時ニ當テハ即チ右代理人及支配人タルノ  
廉ヲ以テ工部省官負ト照會往復シ大災ノ消滅

シ炭坑ヲ回ニ復スルノ方法等共ニ商議ニ及ヒ  
タリ  
第九 炭坑事業ノ為メ弊社ノ金ヲ以テ純エス  
許多ノ機械ヲ外國ヨリ買入レ之ヲ高島ニ五等  
セタリ是レ後藤象次郎氏ヨリ機械ハ弊社ノ所  
有トシ弊社ニテ之ヲ他所ニ移サント欲スル時  
ハ然カスルヲ得ヘキニハ弊社ハ炭坑内何地ニ  
出入スルモ金ヲ自由タルヘシト云フ判書タル事  
而シテ約束アリレカ故ナリ  
第十 然ルニ本年二月中後藤象次郎氏長崎ニ  
下リ兼テハ約束契約ニ違背シテ弊社炭坑事務  
代理人ノ職ヲ解キ一切ノ支配ヲ自ラシ出産ノ  
石炭ハ何程ヲモ弊社ニ渡スルヲ拒絶セラレタ

ト  
答  
ハ  
自

第十一 斯、如ク後益象次郎氏ニ於テ其約定ヲ違背セラレタルニ付、弊社之ヲ日本ノ裁判所へ告訴シ而メ本訴未決中所有品保護ノ為メ令ヲ下シ其使用ヲ停止アラシメテ出願シタルニ實際有効ノ保護ヲ与フルニ外ニ為スヘキノ及ナキ此停止ノ令ヲ遂允ナク其事情ハ即チ別紙歎未去ニ記スルカ如キニシテ裁判所ニ於テ裁判アルヘキノ冀望ヲ我等ニ失ハレタリ其後本年四月二日長崎ニ於テ更ニ後益象次郎氏ト借約レ毎石銀万二千兩若クハ其高相当ノ金員ヲ同氏ヨリ弊社へお戻シ又同年十月二日迄二十萬弗ヲ拂入レラルヘキノ事ニ取極メ且同

第六月ヲ以テ是迄ノ取締ヲ改良レ關係諸人ノ利益ヲ保護スヘキ約定ヲ借フヘシトノ事ヲモ此時ニ約束シタリ  
第十二 仍テ六月ニ至リ此約束ニ基キ弊社并其外債主タル諸人ノ利益ヲ保護スヘキ約定ヲ取結ハント欲シテ後益象次郎氏ト談判ニ手掛リ弊社ニ於テ約定ノ草案ヲ作り之ヲ示シテ同氏ノ承諾ヲ求メタルニ其條款坑法ニ抵觸スルノ由ヲ以テ同氏之ニ調印スルヲ拒マレタリ然レニ弊社ニテ作案セシ此約定ノ條款ニ於テハ我カ利益ヲ後益ニ充分保護センニハ極メテ必要ナルヲ他ノ説ヲモ聞キ必ス其然ルヲ信スルナリ



其十三 後後象次郎氏ニ於テハ目今會計ノ困  
難極メテ甚キニ至リ本年四月二日ニ取結ビ  
タル弊社トノ約定ヲ履行セラル、ヲ得ス現今  
弊社ヘノ負債ハ炭坑其外ノ口ニテ百十萬内外  
ノ金額ナリ他ノ債主モ亦頻リニ其返金ヲ促シ  
中ニハ既ニ同氏ヲ相手ニテ出訴ニ及ビ裁判ヲ  
受ケタルモ之レアリ

又退テ炭坑ヲ顧レハ作業ニ必須ノ資本乏キヨ  
リシテ大ニ錯雜紛乱ノ景状ニ陥リ出產ノ石炭  
ニ於テハ掘方ノ不注意ナルカ為ニ其品位ヲ落  
スノミナラズ且金調ヲ急キ強テ之ヲ賣捌ニ因  
リ其價格モ亦随テ市場ニ下落スルノ勢ナリ加  
之ニ坑夫其外ノ雇人ニ對シテハ渡金巨額ノ淹

滞アリテ此渡金ノ淹滞且福事不返歸ノ故ニ彼  
輩遂ニ一揆ヲモ起スニ至リ之カ為メ大ニ所有  
品ヲ損シ炭坑ニ害ヲナシタルヲ實ニ甚シ此上  
マタ何時ニ駭擾ノ害スルモ知ル可カラサルナリ  
今ヤ後後象次郎氏ヨリハ尚又頻リニ弊社ニ出  
金ヲ迫ララル、モ弊社ニ於テハ同氏調印シ政府  
領承セラル、確固タル約定書ナリテハ何分此  
出金ヲ為シ能ハサルナリ然ルニ同氏ハ弊社ノ  
之ヲ承諾スルニ非スンハ炭坑將來ノ出品ヲ以  
テ他ノ外國人ヘ抵当ニナスヘシト兼テ弊社ト  
ノ約定ニ悖リ又其自ラ言ヘル日本國坑法ニ背  
クノ事ヲ以テ弊社ヲ恐嚇セリ

其十四 炭坑讓渡年賦金ノ日本政府ヘ上納ス

ハキ残額今尚大凡二十九萬弗アリ此内五萬弗  
ハ千八百七十七年十二月納分ノ不足ニシテ六  
萬五千弗ハ本年十二月ニ納ムヘキ高十リ  
第十五 別紙願書第三十節ニ記スルカ如ク  
高島炭坑ハ實ニ一大有益ノ所有物タリ故ニ其  
取扱ニシテ宜キヲ得ハ後多象次郎氏之カ為メ  
ノ負債ヲ償フヲ難キニ非ス然ルニ其事業ノ阻滯  
今日ノ如クナル片ハ實ニ不幸ノ甚シキモノニ  
テ現ニ之ニ関スル数千ノ雇夫等為ニ糊口ノ途  
ヲ失フノミナラス此國鑛山ノ開發ニ害ヲナス  
モ亦甚々大ナルヘキナリ  
我等以上ノ事實書ヲ以テ左ノ數項ヲ開示レ  
タリト信ス曰ク一國有益ノ大工業今方リニ其

興廢ニ関スヘキ危急ノ場合ニ墮セリ而シテ此工  
業々々ヤ我等多年之ヲ維持開發シ其極高ヲ以  
テ我等確實ニ巨額ノ出金ヲ為シタリ曰ク我等  
此困難ノ状態ヲ挽回セント百方々思フ考セシ  
モ功ヲ得サリキ曰ク今ヤ日本政府ニ向テ其権威  
ヲ以テ満足ニ事ヲ了ラセシムルノ必要アラシ  
クテ我等依頼セサルヲ得カルノ時期ニ至リタリ  
我等関係タル諸人ノ為ニ政府ノ干渉ヲ請願ス  
ルノ理由在リ其要款ヲ掲ク  
(イ) 高島炭坑ハ日本人ノ貨物ニナル甚々有益  
ナル政府ノ所有物ニシテ其年賦上納金  
モ未ダ皆済ニ至ラサルナリ  
(ロ) 本政府ノ借主ニ於テハ炭坑ヲ確實

夕  
系  
省

ト  
各  
省

ナル抵当ト候エルニ是ラシムルノ事情ニテ  
外國為社ヨリ巨額ノ金貨ヲ出サシメ  
而シテ其金貨ハ多分政府ノ手ニ收メ  
切ニナリタルモノナリ

(ハ) 別紙類本等ニ記スルカ如ク政府ノ高置  
振ハ直接間接共ニ炭坑ノ借入カ其産  
物ヲ抵当トシ我等ヨリ出金ヲナスノ時ニ  
當リ其所為ノ日本國法又ハ渡山ニ関ス  
ル規則ニ背悞スルニ非サルヲ我等ニ條  
用セシムルニ是リシモノナリ

(ニ) 我等裁判所ニ告訴セシモ切テ得サリキ

(ホ) 本件利害ノ關係甚々重ク且政府ノ又  
他人ニ對スルノ情義ニ於テ外事件トハ

自ラ相同シカラサル所アリ而シテ能ク之  
ニ必要ノ援助ヲ与フルハ獨リ政府ノ權  
力ニ在ルノミ

(一) 事情甚々切迫最モ速急ノ要置ヲ要ス若  
シ然ラサレハ所有物ノ害ヲ被ルルヤ愈  
々甚シク遂ニ全然ノ損廢ニ至ラントス  
今閣下ニ依頼シ前文所掲ノ明瞭ナル事實書ヲ  
以テ日本政府ニ呈シ公私ノ大害既ニ急ニ迫ラ  
ントスルノ場合ニ其干涉ヲ願フニ當リ我等私  
力ニ確信ス爰ニ款願スル此困難タルヤ原ト我  
等ニ於テ常ニ高貴ナル日本人ノ實義ヲ信任ス  
ルノ深キカ爲ニ多少此ニ至クモ事タルヲ以テ  
皇帝陛下ノ政府ニ於テハ特ニ速ニ我等請求ノ

正理タルヲ認識セラルヘシト頓首再拝  
於横濱

千八百七十八年九月廿七日

ジャルデン、マテシ高社

在東京英國公使

エル、ハル、エス、パークス、ケ、シ、ヒ

閣下

許件願末書

第一条 ジャルデン、マテシ高社ハ支那日本  
香港ニ於テ營業スル英國商人ナリ  
第二条 後藤象二郎氏ハ一士族ニシテ嘗テ日  
本政府ニ於テ各種ノ顯官高職ニ補セラレタル  
者ニ有之同人儀ハ一千八百七十一年ニ於テハ  
其頃東京ニ於テ新立シタル工部省ノ卿ニ任セ  
ラレ一千八百七十二年ニハ參議即チ内閣ニ在  
ル國政ノ議官ト為リ尋テ東京横濱三菱社銀行  
ノ社長ト為レリ該社ハ官ノ保護ヲ受ケテ創立  
シ政府ト巨額ノ取引アリシ銀行ナリ一千八百  
七十五年ノ始メニハ當時新設ノ元老院即チ上

ト  
務  
省

院ノ副議長ニ任セラル一千八百七十五年ノ末  
カ或ハ一千八百七十六年ノ始メニ至ルマテ同  
人其職ヲ奉セラレタリ而シテ該院ノ議長タル  
者ハ一千八百七十七年皇族有栖川宮本官ニ任  
セラルトマテ閣員タリシヲ以テ當時同人儀ハ  
實際ニ於テ長官タリ  
第三條 高島石炭坑及ヒ石炭山ハ(盛大ニ外國  
ノ機關器具ヲ用ヒ或ハ外人ニテ其取扱人又ハ  
所有人ト為リテ關係スルハ此石炭山ノ長崎  
近傍ノ一島ナル高島ニ在リ一千八百六十八年  
ヨリ一千八百七十年ニ至ルマテハ在長崎英商  
クロウエル會社ノ取扱タリ是ハ一千八百六十八  
年同會社ト肥前侯トノ約定ニ依リ約定當日ヨ

リ七時半ノ期限ヲ以テ高島全島ノ石炭ヲ掘採  
シ之ヲ管理セシメタルナリ右約定ニ依テ(双方  
ヨリ平等ニ準備ス可キ)器械ノ一項ヲ除クノ外  
グロウエル會社一手ニテ諸雜費ヲ仕拂ヒ坑工ノ  
費用ハ掘出シタル石炭ノ利ヲ以テ仕拂ヒ純益  
ハ毎三ヶ月ニ平等配分ス可ク且ワグロウエル會  
社ハ此配分金ノ内ヨリ該島產出ノ石炭一噸ニ  
付金壹圓ノ運上ヲ納メ然レテ約定期限ニ至リ  
肥前侯再ヒ約定ヲ結フヲ得サレノ事情アル  
トキハグロウエル會社ニテ備置セタル器械ハ原  
價ヲ以テ肥前侯ヘ引取ラレヘキ取極メナリキ  
一千八百七十八年八月中右グロウエル會社ハ破産  
ニ及ヒ社務取扱一切石炭坑ノ利益トモ當分ノ

ト  
務  
官

丙在 日本和蘭商社代理人ノ手ニ属シ右代理人  
ニテ各債主等ヨリ委托ヲ受ケテ石炭坑及ヒ石  
炭山ノ事業ヲ引受ケタルナリ  
ガロウル會社破産ノ後ニ至リ日本政府ハ肥前  
侯カガロウル會社ト締盟シタル約定書ヲ取上  
ケ一千八百七十四年ガロウル會社ヨリ政府ニ  
對スル詞訟ノ引受人ト談判ヲ遂ケ更ニ約定ヲ  
結ヒ政府ヨリ大約洋銀四十万弗ヲ同人ニ渡シ  
以テ石炭坑石炭山及ヒ其工業共悉皆政府ノ所  
有ニ属シタリ  
第四條 ジャルゲン、マテソン氏會社ハ豫ネテ  
後藤象二郎氏ト金錢ノ取引ヲナシ居タリシニ  
一千八百七十四年中後藤氏ヨリ右會社ニ相談

ニ同氏ニテハ高島石炭坑石炭山共政府ヨリ永  
久借區ノ免許ヲ得タルニ就キ右買入代金ノ資  
本取替ヲ願度尤其償却方ハ右石炭坑及石炭山  
ノ出高並ニ營業ノ利益ヲ以テシ且ツ信憑ヲ確  
實ナラシメンカ為メニジャルゲン、マテソン氏  
會社ヲ以テ該工業并ニ石炭賣捌方代理人トナ  
スヘシトノ事ナリ仍テジャルゲン、マテソン氏  
會社ハ右ノ如ク確實ナル抵当アルニ付資本金  
ヲ振替フヘキ約定ヲ承諾シタリ  
第五條 右ニ付一千八百七十四年十一月二十  
八日ジャルゲン、マテソン氏會社ハ後藤氏ノ需  
メニ右ニ洋銀拾万弗ヲ手形ニテ渡シタリ右手  
形ハ日本政府大藏省ヨリ引替ニ来リ正ニ引替

ト  
務  
省

相済タル上石炭山拂下代ノ内金受領証ヲ大藏  
省ヨリ渡サレ現ニジャルゲン、マテワン氏會社  
ニ於テ之ヲ所持セリ  
第六條 一千八百七十四年十二月ジャルゲン、  
マテワン會社ハ正レク後藤象二郎氏ヨリ石石  
炭坑並ニ石炭山ノ代理人ヲ命セラレ以來又同  
會社ハ該港支那人トシテ特權ヲ以テ後藤氏ノ  
為メニ坑業ニ従事シタリ  
第七條 一千八百七十五年一月十七日後藤象  
二郎氏ニ洋銀五万弗ヲ大藏省ニ納メ同年同月  
二十三日又洋銀五万弗ヲ同省ニ納メタリ二口  
共拂下全年賦上納ノ勘定ナリ右二口ノ金額受  
領ハジャルゲン、マテワン會社ニ於テ所持セリ

但し此金ハ同會社ヨリ直ニ大藏省ニ納メタル  
ニアラス同會社ノ金ヲ後藤氏ノ手ヨリ納メタ  
ルナリ本書第九條ニ掲載スル公正ノ証書未成  
ノ間ハ後藤氏數通ノ証書ヲ以テジャルゲン、マ  
テワン氏會社ヨリ取替ヘタル資本金額ノ拂方  
ハ坑産物ヲ抵当トシ又同會社ヲ代理人トシ以  
テ其約定ヲ確實ニセリ  
第八條 一千八百七十五年三月中ジャルゲン、  
マテワン會社ニ後藤象二郎氏ヨリ相談ニ該石  
炭坑及ヒ石炭山拂下代金殘額トシテ高洋銀二  
拾四万弗日本政府大藏省ニ上納致シ度トノ趣  
ニ命ジヤルゲン、マテワン會社ニ於テハ印度倫  
敦支那特許商會銀行交換手形ヲ以テ前書二十

ト  
務  
自

四万弗ノ金額ヲ渡シ其手形ヲ以テ右銀行ニ於  
テハ日本政府ノ為メニ正金ニ引替ナリ  
右石炭礦山拂下代金上納方ハ左ノ割合ナリ  
其後ニ至テ承知シタリ即チ当金二十万弗其餘  
八年六銖ノ利足リ加ヘ年賦上納ニテ一千八百  
七十五年十二月ニ六万五千弗一千八百七十六  
年十二月ニ六万五千弗一千八百七十七年十二  
月ニ六万五千弗一千八百七十八年十二月ニ六  
万五千弗一千八百七十九年十二月ニ六万五千  
弗一千八百八十年十二月ニ六万五千弗一千八  
百八十一年十二月ニ四万五千。八十五弗のセ  
セントナリ然レニ前書二十四万弗ノ手形ヲ日  
本政府ニ上納シタルハ該石炭礦山拂下代金

ニ無之後藤象二郎氏一身ノ旧借又ハ曩ニ政府  
ヨリ巨額ノ負債アリタル由ナル蓬萊社銀行ノ  
保証人ナルヲ以テ夫カ為メニ政府一納メタル  
ナリト聞ク  
第九條 右石炭坑及ヒ石炭山ノ出高及ヒ其利  
潤ヲ以テジャルゲンマツン會社ノ取替金額  
ヲ消却ス一キ旨其約定ヲ保証スル為メニ後藤  
象二郎氏ハ該石炭坑及ヒ石炭山拂下ケノ証書  
ヲ同會社ニ渡シ且ツ一千八百七十五年七月一  
日附ノ証書ヲ以テ高島石炭坑及ヒ石炭山並ニ  
其屬島拂下ケ代價ノ為メニジャルゲンマツソ  
ン會社ヨリ通計洋銀四十五万三千弗其他別勘  
定ニテ同會社ヨリ洋銀三十万五千弗ノ負債

ト  
務  
省



ブルヲ證明シ總計七拾六万八千弗ニ年割ノ  
利足ヲ加ヘ証書ニ記載シタル約束條款ニ從ヒ  
元利皆消口テノ間ハ高島石炭坑及ヒ石炭山並  
ニ其屬島其外何品ニ拘ラス附屬ノ機械器具一  
式ニヤルガンマテソン會社或ハ其代理人ノ取  
扱ニ委托シ營業スヘキ旨ヲ約諾シタリ又同日  
附ノ別証書ヲ以テ後藤象二郎氏ハビヤルガン  
マテソン氏會社ノ一員タルイドワルド、ホウ平  
以トール氏ヲ以テ其證書ニ掲示シタル権限特  
権義務ヲ附シテ高島石炭坑及ヒ石炭山ヨリ產  
出シタル石炭及ヒ將來產出スヘキ石炭ヲ賣捌  
方代理人ニ命シタリ

第十条　ビヤルガンマテソン氏會社ハ其以來

引續キテ該石炭坑及ヒ石炭山ノ公明ナル支配  
人及代理人トシテ特權ヲ以テ坑業ヲ指揮監督  
シ同所ヨリ產出シタル石炭ヲ悉ク引取り之ヲ  
賣捌キ且ツ要用ノ諸費ヲ仕拂ヒ或ハ石炭ヲ抵  
當ニ前金ヲ出シ又礦山ノ為メニ必用ナル諸器  
械ヲ備ヘ凡ヘテ約定ノ通り勘定ヲ立テタリ

第十一条　一千八百七十五年十二月中ビヤル  
ガンマテソン氏會社ハ後藤象二郎氏ノ依頼ニ  
ニ由リ石炭坑及ヒ石炭山拂下テ代價年賦金六  
万五千弗ヲ手形ニテ日本政府ヘ納メ礦山支配  
人及代理人トシテ大藏省ヨリ右金額ノ受領証  
ヲ得タリ

第十二条　一千八百七十五年八月中後藤象二

ト  
券  
第

郎氏ハ上納金延期ヲ求メ日本政府ノ批准ヲ得  
ルカ為メニ石炭坑及ヒ石炭山拂下ケ証書要用  
ノ趣ヲ陳述シシヤルヂンマテソシ氏會社ヨリ  
右證書ヲ請取タリ其後同社ヨリ右證書返却ヲ  
催促シタルニ本書ノ由ヲ以テ一証書ヲ渡シタ  
リ然ルニ一千八百七十六年三月中後藤象二郎  
氏ハ曩ニ返却シタル証書ハ本書ニ無之全ク其  
寫ニテ本書ハ同氏ヨリ大藏省一拂ウヘキ元金  
拾万弗其利子四千。八十弗六於セントノ抵当  
ニ大藏省ニ差出し置キタリト自状し且日本政  
府ヨリ右元利ノ拂方ヲ同氏ニ催促アリト云リ  
仍テ同氏達ヲ依頼し且ツ前參議即チ國政議官  
ニシテ一千八百七十一年中有権ノ内閣議員タ

リシ板垣退助氏及ヒ同氏ノ親屬タル長屋長祥  
氏ヨリ正確ノ證書ヲ出シテ後藤氏ニシヤル  
ヂンマテソシ氏會社トノ約定無相違履踐ス可  
キ旨ヲ保証シタルニヨリ同會社ハ直ニ大藏省  
ヘ洋銀拾万弗並四千。八十弗六十セントヲ夫  
々ニ納メ右金額ト引替ニ大藏省ヨリ拂下ケ本  
書ヲ同會社ヘ渡サレタリ  
第十三條 一千八百七十六年六月中高島ニ於  
テ新機械要用ノ所シヤルヂンマテソシ氏會社  
ハ從來後藤象二郎氏ニ置キタル信憑ヲ失ヒタ  
ルニ付キ更ニ同氏ニ尚ホ抵當ヲ求メタリ此請  
求ニ從ヒ後藤象二郎氏復タ証書ヲ作り石炭坑  
及ヒ石炭山工業ノ為メニシヤルヂンマテソシ

ト  
務  
省

氏會社ニ於テ輸入シ或ハ買入ル一キ當械ノ事  
ニ付約定ヲ結ビ此約定ニ依リビヤルゲンマテ  
ソノ氏會社ハ後藤氏ノ代理人ト為リ高島及ヒ  
其他ノ石炭坑及ヒ石炭山ノ事ヲ取扱ヒ其知置  
及ヒ工業ヲ為シ其產物ヲ賣捌ク可ク且ツ右輸  
入シ或ハ買入レタル器械ハ同會社ノ所有タル  
可ク同會社ニ於テ相當ナリト見込ム時ハ適宜  
ノ方法ヲ以テ右器械ヲ石炭坑及ヒ石炭山ヨリ  
取除ク事モ亦同會社ノ自由タル可ク夫カ為メ  
ニ同會社ハ石炭坑及ヒ石炭山ノ各部出入勝手  
タル可キ旨ヲ約諾シタリ又同日板垣退助氏ノ  
談合ニ依リ別ニ約定証書ヲ作り甲ノ方ハ後藤  
象二郎氏及ヒ同氏ノ証人數名乙ノ方ハビヤル

ギニマテソノ氏會社ニテ後藤氏ノ債主等一洋  
銀二万二千弗ヲ同會社ヨリ拂渡シ或ハ之ヲ引  
請クルヲ約決定シ其後同會社ニ於テ之ヲ拂渡  
レタリ後藤氏ハ此日ニ於テ同會社ヨリノ負債  
總計洋銀九拾八万。九百拾四弗二十五セシト  
ナル旨且ツ石炭坑及ヒ石炭山ニ関シテ同氏ハ  
係ル同會社ノ権理ヲ明認シ又此金額ハ同會社  
請求次第同氏ヨリ消却スヘキヲ約シタリ右約  
定ニ於テ後藤氏ノ為メニ証人ト為リ一千八百  
七十五年七月ノ抵当英ニ代理約定ヲ保証シタ  
ル一人ハ當時工部省ノ高官タリシ吉井正澄氏  
ニシテ同氏ハ一千八百七十四年十二月中工部  
大輔山尾氏ト共ニ日本政府ノ令ヲ奉シテ該石

ト  
券  
小  
冊

炭坑及石炭山見分ノ為メ且ツ右後藤氏一引  
渡ノ為メ高島ニ赴カレテ又シク高島礦山ノ事  
ヲ熟知セラルル人ナリ

第十四条 一千八百七十六年七月中高島石炭  
坑及石炭山ニ大火災アリ其事情ハ直ニ後藤  
氏ヨリ日本政府ニ報告シ其頃在日本ビヤルダ  
ン、マテソレ氏會社ノ株主ニシテ其事務ヲ取扱  
ヘルケスウ平ヅク氏ハ屢々工部省官吏ニ面會  
シ且ツ屢々往復ヲ重ネ後藤象二郎氏無二ノ財  
源タル礦山恢復ノ方法ヲ申告シタリ且ツケス  
ウ平ヅク氏ハ政府ノ礦山技手ト同伴シテ高島  
ニ到リ後藤氏ト共ニ消防必用ノ手段ヲ協議ノ  
末礦山ニ注水スルヲ決定シタリ然ルニ再ヒ

之レヲ汲尽シテ工業ヲ挽回スルカ為メニ許多  
ノ費用ヲ要スレトモ後藤氏ハ金錢ナク信憑ナ  
キヲ以テ同氏ノ依頼ニ由リジヤルゲレ、マテソ  
レ氏會社ニテ第十三条ニ揭示スルノ約定ニ從  
テ更ニ同會社ヨリ出金ヲナシテ業ヲ起シ之レ  
カ為メニ器械ヲ備ヘ大金ヲ費シテ遂ニ一千八  
百七十七年十一月ニ至テ漸ヤク成功ニ至リタ  
リ

第十五条 一千八百七十七年六月中ジヤルダ  
ン、マテソレ氏會社ハ後藤象二郎氏ノ依頼ニ由  
リ同氏ヨリ政府一納ム可キ礦山拂下ケ代價年  
賦一千八百七十六年十二月納分ナレ洋銀六万  
五千弗ヲ同會社ヨリ日本政府一納ム可キ約定

ト  
務  
八  
百

ヲ結ヒ同會社高島礦山ノ代理人トシテ日本政  
府大藏省ノ為メニ為替ヲ取組ミ手形ヲ以テ右  
金額ヲ拂出シタリ此手形若干ハ日附ヲ延ハシ  
一千八百七十八年八月ニ至テ皆拂ミ至ル者ト  
ナセリ是ノ如クニシテビヤルヂレ、マテワレ氏  
會社ハ日本政府ノ許諾ヲ以テ高島礦山代理人  
タルノ庶ニテ該炭坑ノ為メニ出金ヲナシタル  
ナリ

第十六条 此書第五第七第八第十一第十二第  
十五各ニ記シタル諸口ノ金額總計洋銀六十七  
万四千〇八十弗六十セロトハ總一テビヤルヂ  
レ、マテワレ氏會社ヨリ出金ニ直ニ日本政府ニ  
納メ或ハ後藤象二郎氏ノ手ヲ經由シテ納メタ

リ然ルニ其一部ハ未タ同會社ニ返納ナシ  
第十七条 前条ニ掲ケタル洋銀六十七万四  
千〇八十弗六十セロト及ビ第九条ニ記シタ  
ル洋銀三十一万五千弗ノ外ニ尚ビヤルヂレ、  
マテワレ氏會社ハ該石炭坑及ヒ石炭山ノ為  
メ並ニ後藤氏ニ促進スル債主ノ極ハメテ切  
ナル外ヲ塞クカ為メニ洋銀一万四千弗ヲ拂  
ハシメタリ加之同會社ハ火災且及水ノ為メ  
ニ休業ノ間モ工夫雇人ヲ給養シ一千八百七  
十七年九月中虎列刺病高島ニ流行シタル時  
ハ更ニ出金シテ患者ヲ療養シ又坑山ノ保存  
及ヒ工業ニ関スル巨額ノ會計ヲ一手ニ擔任  
シ前ニハ石炭ノ産出高日ニ三百噸乃至三百

ト  
務  
小

五十噸ナリレヲ日々六百噸乃至八百噸ニ増  
カシメタリ  
第十八條 一千八百七十五年間、於テハ工  
業ノ擴張増進ノ為メニ巨金ヲ費シタルニ由  
リ石炭坑及ヒ石炭ノ産出ハ僅ニ失費ヲ掩フ  
ニ足ルノミナリシガ一千八百七十六年ニハ  
第十四條ニ記レタル水火災害ノ時ニ至ルマ  
テ漸ク其実益ヲ見ルニ至リ一千八百七十七  
年十一月坑内回復ノ後ハ将来利潤ノ目途立  
チ後藤氏ノ負債ハ其利益ヲ以テ償還シ得一  
キノ景况ヲ現ハシタリ  
第十九條 一千八百七十八年二月中後藤象  
二郎氏ハビヤルゲン、マテソン氏會社ニテ勤

定ヲ怠ルトノ辞柄ヲ以テ實際決シテ然ラサ  
ルニ礦山ノ代理人ヲ罷ム可キ旨ヲ同會社一  
書通シ且自身ハ竊ニ長崎ニ來リ炭坑本局ヲ  
總理シ居タルビヤルゲンマテソン會社ノ代  
理人一同氏自ラ其取扱ヲ為ス可キ旨ヲ通知  
シ長等及ヒ高島ニ在ル内外雇人ニ向後同氏  
一人ノ令ヲ奉スヘキ旨ヲ命シビヤルゲン、マ  
テソン氏會社ヲ退ケテ取扱ヲ為サシメス且  
ツ石炭坑及ヒ石炭山ノ利益ニ係ラシメス豫  
テ同會社ニ渡シ置キタル証書類即チ此書第  
九條第十三條ニ記載シタル諸証書ハ皆日本  
坑法ニ違背スル者ナルヲ以テ無用無効ニ属  
スルモノナリト云ヘリ是ニ於テビヤルゲン、

マテソン氏會社ハ此所爲ニ不服ヲ述ヘ遂ニ  
後藤象二郎氏ニ係リテ日本ノ裁判所へ出訴  
ニ及ヒタリ

第二十條 本年二月十八日ジャルゲン、マテ  
ソン氏會社ハ東京裁判所ニ訴状ヲ出シ後藤  
象二郎氏ヲ被告トシテ今般ノ始末ニ至リタ  
ル事實ノ大畧ヲ説明シ後藤氏現今ノ負債總  
計洋銀一百於五万。七百六十六弗於五セ  
トヲ償却シ石炭坑及ヒ石炭山ノ代理並ニ其  
支取ノ事ニ付キ双方ノ間ニ取結ヒタル約定  
ヲ履行ス可キ旨ヲ同氏へ下命アラセテ願  
ヒタリ

第二十一條 同日ジャルゲン、マテソン會社

ハ東京裁判所ニ願書出シ裁判所ノ禁令ヲ以  
テ後藤象二郎氏該石炭坑及ヒ石炭山ノ產物  
賣拂ヲ差留メテ且前條ノ許件未次中ハ石  
炭坑及ヒ石炭山ヲ使用シ或ハ同會社ノ取扱  
ニ関涉スルコトヲ禁セラルヘキ旨ヲ願タリ

第二十二條 東京裁判所ハ本年二月二十一  
日ノ指令書ヲ以テ前條ノ願書ヲ却下セラレ  
タリ仍テ即日ジャルゲン、マテソン會社ハ東  
京上等裁判所ニ控訴シタリ  
第二十三條 東京上等裁判所モ亦本年二月  
二十二日ノ指令書ヲ以テ願書ヲ却下セシ東  
京裁判所ノ指令ヲ認可セラレタリ  
第二十四條 本年二月二十三日ジャルゲン、

ト  
務  
省

マテソレ會社ハ前条東京上等裁判所ノ指令  
不服ヲ以テ大審院即チ日本無上ノ裁判所ニ  
上告シタリ然ルニ該院ニ於テハ本年三月十  
五日ノ判決ヲ以テ東京裁判所ノ指令其書体  
宜シカラサル旨ヲ弁明シ同裁判所ヨリ尚公  
正ノ指令書ヲ求ムヘキ旨ヲ申渡サレタリ仍  
テ同會社ハ東京裁判所ヘ公正ノ指令書若ク  
ハ再審ノ上新指令書ヲ下付アラニトテ再願  
シタルニ右願ヲ却テ受理セラレス故ニ同會  
社ハ其利益ヲ保護スルノ方便ヲ失ヒタリ  
第二十五条 本年三月八日ヰヤルゲン、マテ  
ソレ會社ハ第十三条ニ載セタル後藤象二郎  
氏ノ約条ヲ保証シ連署シテ後藤氏ノ負債ヲ

消却スヘキ旨ヲ種々ニ約定シタル人々ニ係  
リテ訴訟ヲ初メタリ  
第二十六条 右訴訟尙未決ノ際本年四月二  
日ニ至リヰヤルゲン、マテソレ會社ハ前条許  
訟ノ被告人等ノ保証ニテ後藤象二郎氏ト約  
定ヲ結ヒ同氏及ヒ前条ノ人々ニ對スル訴訟  
ヲ一時願下クヘク後藤氏ニ於テハ日々石炭  
百二十噸或ハ其相当代金ヲ日々同會社ヘ可  
相渡且ツ同日ヨリ向六ヶ月期限内ニ洋銀二  
十萬弗ヲ同會社ヘ可相渡等ニ約諾シタリ然  
ルニ後藤氏ハ右約定ノ石炭渡方又ハ其相当  
代金拂方ヲ違約シタリ  
第二十七条 本年三月二十九日ヰヤルゲン、

ト  
務  
省



マテソシ會社ハ後藤象二郎氏並ニ前各ニ示  
シタル諸人ヨリ違テノ依頼ニヨリ同會社ヨ  
リ東京裁判所ニ訴ヘタル訴訟裁判ノ中止ヲ願  
ヒ本年四月四日ニ至リ該訴被告人等ヨリ尚  
折入テノ依頼ニヨリ前第二十六各ニ掲載シ  
タル約定此度履行ス可キ旨約束ノ上ニテ現  
在同會社ノ本訴被告人等ニ對スル権理ヲ害  
スルナキ様ニシテ詞訟ヲ願下ケタリ  
第二十八各 本年四月八日後藤象二郎氏ハ  
シヤルゲン、マテソシ會社ト副約定ヲ結ヒ同  
會社ヲ以テ高島礦山ノ代理人ト認ム一キト  
決シ差向仮約定ヲ結ヒ翌々六月初旬ヲ以テ  
シヤルゲン、マテソシ會社株主ノ一人横濱ニ

於テ後藤氏ニ會シ永久ノ約定ヲ結フ一ク且  
日本政府ノ許可ヲ得ヘキ礦山事業ノ總理ヲ  
右會社ニ委任スヘク又同會社ニ於テハ後藤  
氏同氏ノ債主等ニ對シテ礦山ノ利益ニ関シ  
相当ニシテ落着必要ナル讓與ヲナスヘシト  
約定シタリ  
右約定取極メノ為メシヤルゲン、マテソシ會  
社株主ノ一人タルシヨシン氏ハ本年六月  
初旬上海ヨリ横濱ニ赴ク途中長等ニ着シ後  
藤氏ニ面會シ全權支那人ヲ委任ス一キ新約  
定ノ大体ヲ決定シ該會社ノ代人ヲ以テ炭礦  
社即チ在長等、高島石炭礦本局ノ支那人ニ命  
シタリ而シテシヨシン氏ハ横濱ニ往キ後

ト  
務  
省

藤氏モ程ナク同所ニ往ク一キ約定ヲ為シタ  
リ然ルニ後藤氏ハ無其係同氏ノ親屬吉田マ  
スハラ氏ニ代理ヲ命ジ該約定ノ取極メ並ニ  
調印ノ全権ヲ委任シタリ良久商議ノ上大体  
前ノ談判ニ從ヒ約定書ヲ作り(附録ヲ參觀ス  
可シ)吉田氏ノ可認ヲ求メタルニ同人之レヲ  
承諾セス其之レヲ拒ムノ大主意ハ約定ノ條  
款明ラカニ日本ノ法律ニ背クト云フニ在リ  
而シテ同氏ハ其本人ノ為メニビヤルヂレマ  
テソレ會社一法律ノ許ス所ニシテ日本政府  
ノ許可スヘキ物ハ之抵当トスヘシト云ヘリ  
第二十九条 後藤象二郎氏ハ當時ビヤルヂ  
ン、マテソン會社一ノ負債大約洋銀壹百於万

弗其外同氏ノ申口ニテハ内外人ヨリノ負債  
大約三於万弗アリ而シテ右債主等ハ大抵此度  
企テタル約定ニ加入シタキ意ナリ  
第三十条 後藤象二郎氏ノ重ナル財産ハ高  
島石炭坑及ヒ石炭山ナリ是レハ貴重ナル所  
有物ニシテ取扱宜シキヲ得レハ同氏該礦山  
ニ関シテ負荷セル義務ヲ脩スニ足ル可シ該  
礦山ノ巨大ナルハ當時日本國中ニ於テ最大  
無比ニシテ國民大工業ノ一ニ居リ其職工及  
ヒ家族ヲ俵マテ大約七千人ノ民口ヲ養ヒ其  
産出ハ長壽出港利益ノ要項ヲ占メ即今ノ景  
光ニテハ日々六百噸乃至八百噸ノ石炭ヲ産  
出シ其多量ニシテ且ツ良質ナルヲ以テ支那

日本海ニ於テハ無上ノ声價ヲ得タリ  
高島炭礦當時ノ取扱人ニテ製シタル工業計  
算表ニ拠レハ本年二月十三日より同年六月  
三十日迄ニ得タル純益ハ洋銀六万四千三百  
五十六弗二十九セリトナリト云フ此計算ハ  
若シ後藤氏ノ資本十分ニシテ能ク其業ヲ営  
ム時ハ尚多キヲ加フ可シ石年月間同氏ノ親  
属ニヤルゲレ、マテソレ會社ト終結ノ為メニ  
當時石炭ノ産出ハ毎月平均僅ニ壹万三千噸  
ナリト雖モ若シ平常取扱周密ナル時ハ毎月  
ノ平均壹万六千噸ニ下ラリレ可ク恐ラクハ  
尚増加ス可シ

第三十一条 本年七月二十八日高島ニ於テ

激烈ナル一揆アリ蓋シ礦夫ノ給料淹滞ノ為  
メナリ外國技手及ヒ監督ハ止ムヲ得スレテ  
其身命保護ノ為メニ該島ヲ去リ實ニ財産ヲ  
損害セリ其價洋銀六千弗乃至壹万弗ニ及ヘ  
リ其乱妨當ニ財産ヲ破毀スルノトナラス為  
メニ大業ヲ廢棄シテ今日未タ恢復セズ隨テ  
産出ヲ減却シ石炭坑及ヒ石炭山ノ利益ヲ失  
フ亦甚大ナリ

第三十二条 日今後藤象二郎氏ハ會計窘迫  
ノ為メニ困難中ナリ私債主其負債ヲ促責  
シテ既ニ裁判ヲ受ケタル者アリ一千八百七  
十七年十二月分日本政府へ拂下代價年賦上  
納金洋銀五万弗ハ未納ニシテ翌年十二月分

事務

ノ年賦洋銀六万五千弗モ漸々期限ニ至ル可  
シ且ツ高島礦業ノ為メニ長壽ニ於テモ巨額  
ノ債主アリ又礦夫雇人等給料ノ残金夥多アリ  
後藤氏ノ現況如斯ナルヲ以テジャルゲン、マ  
テソン會社ニ説テ尙出金ヲ乞ヒ同會社若シ  
補助セサレハ豫テ取結ヒタル約定ニ違背シ  
日本坑法ニ從テ向後ノ礦產物ヲ餘人ニ抵当  
トスヘシト云ヘリ然リト雖トモ該會社ニ於  
テハ後藤氏調印シテ十分ノ抵当ヲ出シ満足  
ノ約定ヲ結ビ日本政府ノ許可ヲ得ルニアラ  
サレハ此上出金成リ難シ  
第三十三條 現今高島礦山不取締且ツ人心

ハ不平ヲ抱キ危險極度ニ至リ災害並ニ起ラ  
ントスルノ勢アリ一揆暴發則ルヘカラス當  
ニ生命ノ危害礦山ノ損失ノナラズ所有物  
品全ク破壊ニ至ルヘキノ患アリ是時ニ當テ  
後藤象二郎氏ノ會計困難ニレテ十分ニ礦業  
ヲ起ス可キハ資本ニ乏シク目下其會計ノ修  
整ヲ期シ難ク景况益々媿悪ニ向フ可キハ實  
情止ムヲ得サルノ勢ナリ  
ジャルゲン、マテソン會社謹テ在日本英國公  
使ノ手ヲ經由シテ右ノ事實ヲ開陳シ並マテ  
該會社ニ從來右礦山關係ノ財産及ヒ利益ヲ  
保存セシカ為メニ或ハ法庭ニ上告シ或ハ後  
藤氏ニ示談シ百方術ヲ尽レテ皆功ナク實ニ

ト  
務  
省

危急ノ時ニ迫レリ是、於テカ日本政府獨リ  
之ヲ處置ス可ク日本政府ニアラサレハ此患  
害ヲ治ス可カラサルヲ上申セント冀望ス、  
同會社願クハ上ニ陳述スルカ如ク不件ノ事  
情他ト相異ナル所アルヲ以テ只管此國ノ行  
法官ノミナラヌ土地ノ領主ノ代タル日本政府  
府ノ干涉ニ倚賴シ數千人民ヲ使用スル大工  
場ヲ烏有ニ附スルノ患害ヲ除キ財産ヲ保全  
シ之ニ復スル諸人ノ為ニ裁許ヲ與ヘラレシ  
メテ懇願ス敬白

一千八百七十八年九月十八日横濱

ジャルゲン、マテソレ會社

附録

日本帝國東京府士族後藤象次郎第一位ニ在  
リ長崎縣士族峯真興高知縣士族高屋長祥高  
知縣士族板垣退助高知縣士族大江卓和歌山  
縣士族吹田久則高知縣士族竹内綱長崎縣平  
氏青木休一郎高知縣士族島村盛利及高知縣  
士族吉井正澄第二位ニ在リ日本帝國横濱及  
其他ノ地方ニ於テ高業ニ従事スル英高ジャル  
ゲンマテソレ高社第三位ニ在リ  
第四位ニ在テ各位ノ間ニ今

(債主)

千八百七十八年何月何日取結フ約定ノ事  
右後藤象次郎ハ肥前国長崎縣下高島及其他  
在ル石炭坑石炭山及作業場ノ持主タリ而ルニ  
ジヤルダンマテソニ高社ヨリ絶エス許多ノ金額ヲ  
取登、後藤象次郎ヲシテ前頭石炭坑石炭山作業  
場及器械等之ヲ讓受クルノ日ニ存シタル一切  
ノ代金ヲ日本政府ニ納付セシメ且作業ノ手當  
ニ備ヘ石炭坑石炭山及作業場ヲ保持スルヲ得  
セシメタリ元來右ノ金額ハ後藤象次郎ノ請ニ  
依リ前頭石炭坑石炭山作業場及器械ヲ讓受ケ  
且其事業ヲ保持セシムルカ為メニ繰替ヘタル  
者ナルニ因リ後藤象次郎ハ屢ジヤルダンマテソニ高  
社ニ對シ右石炭坑石炭山及作業場ノ益金ヲ以

テ右繰替金ヲ償還スヘク且右讓受ノ時石炭坑  
石炭山及作業場ニアリタル器械ハ前頭繰替金  
ノ抵當タルヘキ旨ヲ約定シ同高社ノミヲ以テ  
右石炭坑石炭山及作業場ヨリ生出スル一切ノ  
石炭賣捌方ノ代人ト定メ(數年間之ニ從事セシ  
メタリ)其事ニ付テハ第二位ノ承諾ヲ受ケタル  
上書面ニテ同高社ト特別ノ約定ヲ取結ヒタリ  
而シテジヤルダンマテソニ高社ハ前頭及其他ノ約定  
ニ從ヒ右ノ石炭坑石炭山及作業場ヲ保護シ其  
工業ヲ執行スルカ為メ絶エス要用ナル一切ノ  
器械ヲ買入レ後藤象次郎ハ右特別ノ約定ニ據  
リ其器械ヲ使用セリ而ルニ後藤象次郎ハ是迄  
前頭繰替金ノ償還ヲ怠リタルノミナラス他ノ

引合ニ於テモ亦同商社ニ負債アリテ後藤象次  
郎ガ現ニジヤルヂニマテソニ商社ニ對シテ有スル所ノ  
負債ハ通計、、、、、ノ高ニ至レリ是レ後藤象  
次郎及第ニ位第ニ位ノ各負皆共ニ承認スル所  
ナリ加ルニ後藤象次郎ハ第ニ位ノ各負ニ對シ  
マタ別紙目錄ニ記載セルカ如キノ負債アリ是  
ニ由テ其カニ應スルカケ法律ニ適スル限リハ  
右石炭坑石炭山及作業場ノ産品賣却ノ所得金  
ヲ以テジヤルヂニマテソニ商社及其他ノ債主ニ對ス  
ル負債ヲ辨償セシムラ希望シジヤルヂニマテソニ商  
社ハ後藤象次郎又ハ第ニ位ノ各負ニ對シ有ス  
ル所ノ要求及其權利ヲ害スルコトナク後藤象次  
郎ニ助カシテ右ノ負債ヲ辨償セシメンコトヲ承

諾シ而シテ第ニ位ノ各負ハ後藤象次郎ヨリジ  
ヤルヂニマテソニ商社ニ對スル負債ニ於テ重大ノ責  
任ヲ負擔スルガ故ニ此約定ノ條款ヲ承諾セリ  
是ニ於テ各位相共ニ約定ヲ取結フコト左ノ如シ  
一前頭石炭坑石炭山及作業場ハ今後ジヤルヂニ  
マテソニ商社ノ推舉ニ由リ後藤象次郎ニ任  
スル管事ノ指揮管理ニ屬シ後藤象次郎ノ為  
メニ其工業ヲ為スヘシ而シテ右ノ管事ハジヤ  
ルヂニマテソニ商社ニテ要用ト認ムルコトハ何時  
ニテモ之ヲ免職代置スヘシ  
一右管事ノ権限職掌左ノ如シ  
長崎ニ居住シテ前頭石炭坑石炭山及作業場  
ノ本局ヲ總轄スヘシ

前頭石炭坑石炭山及作業場日々ノ出入計  
算及石炭ノ賣捌ニ關係スル一切ノ事務ヲ  
惣理スヘシ  
計算ノ帳合ヲ指揮監督スヘシ  
前頭石炭坑石炭山及作業場ノ費用ヲ仕掛  
ヒ或ハ器械使用品其他諸坑ノ保護及工業  
用ノ物品ヲ買入レ又ハ買入ノ約定ヲ取結  
フナハ都テ管事ノ承諾書ヲ要スヘシ  
前頭石炭坑石炭山及作業場ノ産品賣捌ノ  
節ハ其時々管事ノ承諾書ヲ要ス且石炭ノ  
取引ハ管事ノ記名又ハ加印セル証書ヲ以  
テシ其代金ハ管事之ヲ受取り管事ヨリ本  
ル所ノ受取書ヲ以テ其確證トスヘシ

請取金ノ内餘裕アルナハ管事ニテ之ヲ以  
テ前頭石炭坑石炭山及作業場ノ要費ヲ支給  
スヘシ且管事ハ要費支給ノ為メ必要トス  
ル所ノ産品ヲ引当ニ金負ノ前借ヲナスノ  
權アルヘシ  
前頭石炭坑石炭山及作業場ノ用ニテ蒸氣  
船帆前船又ハ其他ノ船ヲ雇ヒ入ル、節ハ  
管事ノ承諾ヲ要スヘシ  
管事ハ前頭石炭坑石炭山及作業場ノ管理  
及工作ニ關係スル一切ノ事務ニ付後藤象  
次郎又ハ其代人ト評議ヲ遂ケ且其相談ヲ  
受クヘシ然レモ人ヲ雇入ル、ニハ管事ヨ  
リ後藤象次郎又高島ニアル其代人ニ其不

ト  
務



可ナル旨ヲ書通スル者ハ雇入ル、一ラ得ス  
管理上ノ事務ニ至テモ亦然リトス  
管事ノ月給ハ洋銀五百井トス又時ニ依リ  
後藤象次郎トジヤルデンマテソン商社協議ノ上  
ニテ改ル、一アルヘシ後藤象次郎ヨリ之ヲ  
支給スヘシ而シテ管事雇役ノ約定并其ノ雇  
役期限ニ関スル特別ノ約定及之ヲ解雇ス  
ルノ事ハジヤルデンマテソン商社ノ許諾ニ依ル  
ヘシ  
管事ハ毎月末又ハ翌月ニテモ成ルヘク速  
カニ前頭石炭坑石炭山及作業場ニテ一ケ  
月間石炭ノ産出高賣渡高入金高及出金高  
計算書并餘金(若シアラハ)即チ純益金トシ

テ配當スヘキ金高ノ計算書ヲ各ニ通定後  
藤象次郎及ジヤルデンマテソン商社ニ差出スヘ  
シ而シテ六ケ月毎又ハ後ル、一モ成ルヘク  
速ニ管事ヨリ前頭石炭坑石炭山及作業場  
前六ケ月間ノ損益計算書ヲニ通定後藤象  
次郎及ジヤルデンマテソン商社ニ差出スヘシ右  
ノ如ク毎月又ハ毎六ケ月ノ計算書ヲ差出  
スルハ藤象ノ純益金(若シアラハ)及餘金ノ  
利益金(若シアラハ)ヲ在長崎、一、一、一、一、一、  
、一、支店若シクハ後藤象次郎及ヒジヤルデン  
マテソン商社ニテ協議ノ上定ムル其他ノ銀行  
ニ預ケ置キ第一位第三位及第四位ノ各負  
共ニ本日取結フ所ノ約定ノ条目ニ從テ右ノ

事務

金額ヲ受取ルヘキ権利ヲ有スル者ト定ム  
ヘキ人負共同ノ預ケ分トナスヘシ但シ其  
人負ハ二名ニ限り一名ハ後藤象次郎一名  
ハジヤルゲンマテソン高社ニテ任用スヘシ  
上ニ述ヘ又下ニ記セル如キ金額ヲ保管人  
トシテ受取ルノ権利アル人負ハ都テ右ノ  
月掛金ヲ受取リタル上又ハ其適當ト認ム  
ル時速カニ左ノ方法ヲ以テ右ノ金額ヲ處  
置スヘシ

- 一 金額十分ノ一ヲ後藤象次郎ニ渡スヘシ
- 二 十分ノ二ヲ第四位ノ為メニ除キ置キ其  
各自ノ貸高ニ應シタル割合ニテ之ヲ償  
還スヘシ

三 十分ノ六ヲジヤルゲンマテソン高社ニ渡シ  
先後藤象次郎ノ負債辨濟方ニ差向ケヘ  
シ

四 十分ノ一ヲ保管人ニテ保存シ高島準備  
金ト唱フル金額中ニ差加ヘ置キ後藤象  
次郎トジヤルゲンマテソン高社ト共同シテ指  
揮スル方法ニ從ヒ入用ノ時ニ之ヲ使用  
スヘシ

一 前頭ノ諸件ニ関係スルノ外管事ハ後藤象次  
郎ノ雇人タルニ過キサレハ産品賣捌方并其  
他職掌上ニ付テハ成ルヘク後藤象次郎ノ指  
揮ヲ遵守スヘシ然レモジヤルゲンマテソン高社ノ  
請又ハ其承認ヲ受ケタル上ニアラサレハ管

事ノ雇ヲ解<sub>レ</sub>テ得<sub>ス</sub>且ジヤルゲンマテソニ高社ハ  
前頭石炭坑石炭山及作業場ヨリ産出スル一  
切ノ石炭ヲ各回各地(日本帝国ノ外)ニ賣捌方  
ノ代理人ト為リ右石炭賣捌方ニ付通例ノ口  
銭海運保険料及陸揚費庫敷料并火難保険料等  
ノ外別ニ二分五厘ノ手数料ヲ申請クヘシ  
一ジヤルゲンマテソニ高社ハ相當ノ船書類并外国港  
ヘノ積貨保険證書ヲ受取ル時ハ管事ノ請ニ  
應シ右積貨ノ純益見積高ノ八割ヨリ多カラ  
サル金額ヲ繰替ニヘシ  
一ジヤルゲンマテソニ高社ハ管事ヨリ請望アレハ前  
頭石炭坑石炭山ヨリ産出ノ石炭ヲ同高社ノ  
承可セル倉庫ニ納置ク時右石炭ヲ引当ニ共

代價見積高ニ應シ繰替金ヲナスヘシ但シ右  
繰替金ハ管事ニテ代價ヲ見積リタル高ノ八  
割ニ過クヘカラス尤右ノ石炭ハ管事ニテジヤ  
ルゲンマテソニ高社ノ名前後藤象次郎ノ費用ニ  
テ充分火難ヲ保険セシムヘシ  
一前頭繰替金ノ利子ハ都テ一年一割タルヘ  
シ而シテ長崎ニ貯藏セル石炭ニ関スル繰替  
金ノ利子ハ都テ月末毎ニ拂入ルヘシ  
一外国諸港ニ船積セル石炭賣捌ノ計算書ハ都  
テ右船積ノ石炭ヲ賣捌キ代金ヲ受取リタル  
上ニテジヤルゲンマテソニ高社ヨリ成ルヘク速ク  
ニ之ヲ管事ニ差送ルヘシ而シテ右ノ計算書  
ハ同高社及管事ノ間ニ勘定ヲ立ツヘシ

一 ジヤルヂンマテソニ社ハ前頭石炭坑及石炭山ヨリ  
採掘セル一切ノ石炭ヲ日本ニテ賣捌キタル  
金高ノ二分ヲ手数料トシテ月末毎ニ申請ク  
ヘシ

一 此約定書ハ後藤象次郎カ前頭石炭坑石炭山  
及作業場ノ持主タル間并ニ其ジヤルヂンマテソニ  
商社ニ對スル負債全ク償還ニ至ルマテノ間  
有効ノ者タルヘシ然レモ右石炭山ノ純益金  
六ヶ月洋銀七万弗ニ至ラザル子又何等ノ事  
故アルトモジヤルヂンマテソニ商社ニテ六ヶ月ノ  
末期ニ至リ此約定面ニ隨ヒ純益金ノ配當高  
トシテ少クモ洋銀四万二千弗ヲ収入セサル  
トハジヤルヂンマテソニ商社ニテ何時ニテモ此約

定ヲ廢止スルヲ得ヘシ而シテ同商社ニテ此ノ  
如ク此約定ヲ廢止セントスルハ一ヶ月以  
前其趣ヲ認メ長崎ニアル後藤象次郎ノ事務  
所ニ報告スヘシ

一 ジヤルヂンマテソニ商社ニテ後藤象次郎又ハ其所  
有物ニ對スル権利或ハ同商社ニテ後藤象次  
郎ノ負債保證人又ハ連借人タル人負ニ對ス  
ル権利或ハ同商社ニテ右負債ノ抵當トシテ  
取置ク補助ノ抵當物ニ對スルノ權利ハ後令  
此約定書中ニ抵觸ノ事項ヲ記載アルモ之レ  
カ為メニ影響屈抑セララズ而シテ後  
藤象次郎ハ此約定有効ノ間始終力ヲ尽シテ  
前頭石炭坑石炭山及作業場ノ利益ヲ進捗セ

ト  
務

シメ石炭坑石炭山及作業場并其工業ノ為メ  
時々法律ニ適當スル大ノ便利ヲ施為シ此ノ  
約定書ニ關係セル人員ノ權利又ハ利益ヲ屈  
抑スルカ如キ事ヲ行フヘカラス  
一 第二位第三位及第四位ノ各負ハ此約定有効  
ノ間前頭石炭坑石炭山及作業場ノ利益ヲ進  
歩セシメ此約定中記載セルカ如ク其工業ヲ  
施コシ其管理ヲ行ハニ一ニ尽カスヘシ  
一 此約定書ハ日本政府ノ裁可准許ヲ得サル迄  
ハ実施遵行スヘカラス故ニ各負ノ交誼又ハ  
其相互ノ權利モ亦之カ為メニ影響交換又ハ  
屈抑セララルヘカラス